

江東の川文化

法政大学サステナビリティ研究教育機構 研究員 難波 匡甫

1. 江東の川

今年5月に開業した東京スカイツリーの足元が江東（隅田川の東側）という地域です。江東は隅田川河口に位置していて、江戸時代に開削された掘割が、江東内部河川として残っています。

明暦3年（1657）、江戸城をはじめ市中の大半を焼き尽くす「明暦の大火」が起こり、その後の復興において、町は様変わりしました。大火以前の町は、戦国時代の緊張感を残し、東北方面に対する備えもあり、現在の隅田川である大川には橋が架けられていませんでした。明暦の頃には、幕府による統治が安定し、江戸に人が集中したため、すでに町が手狭になっていたと考えられます。

幕府は大火を契機として、町の再編を進めるとともに、当時砂州の広がる江東の開発を行い、後に100万都市へと発展する町の骨格づくりを図りました。砂州の広がる場所を整地するには、大火による瓦礫に加え、表土となる土砂が必要となります。また、地域の排水環境を整えるためにも、開発に際しては小名木川を基軸とし、京間8町（約960m）程度の間隔で、東西方向に縦川や仙台堀川が、南北方向に大横川、横十間川がそれぞれ開削され、その土砂が使用されました（図1）。他にも細かな掘割が開削されたことで、物流手段の主流であった舟運にとって、利便性の高い地域が誕生したわけです。

舟運の利便性が、後の江東発展の原動力となりました。



図-1 嘉永期（1850年頃）の江東の掘割

2. 地域の強みと弱点

江戸時代に開発され、舟運の利便性を生かし発展した江東ですが、低地であったため、洪水に見舞わ

れやすい土地柄でした。舟運の利便性という強みと、洪水が頻発するという弱点が、表裏一体の関係にありました。

そこで、地域として、洪水に対処する知恵や工夫がありました。大川には上流からの流量を制限するための墨田堤や日本堤が普請されました。また、現在でも橋の破損や流出の原因となる流木に対しては、採取者が所有できる慣行があり、実利を伴う水防活動として役立っていたそうです。情報手段が限定されていた当時においては、沿川に立地する氷川神社や香取神社等のネットワークが、大水に関する情報網を形成していたようです。

では、江戸の庶民は個人として、どのように対処していたのでしょうか。数年前、利根川中流の群馬県板倉町において、洪水に関する聞き取り調査を行ったことがあります。昭和に起きた洪水では、いつ、何をどこに避難させるかは、その家の長老の判断に従ったとの話を伺いました。非常時に一番の頼りになるのが、それまでの洪水を経験してきた長老の判断だったわけです。その長老は上流での降雨量とその場所が分かれば、板倉町付近の水量の変化が想定できたそうです。

江戸時代にも似た状況があり、洪水で頼りになったのは、経験によって培われた知恵と、常に川を意識することで磨かれた感性だったと想像することは難しくありません。人の判断に頼ることは心もとない印象を受けますが、現在はむしろ、川に対する感性が錆び付き、洪水に対する人の判断があまりにも鈍っているように感じられます。江戸庶民は、川に対する感性を洪水だけに利用したのではなく、舟運などの生業や舟遊山やつりなどの遊興において、遺憾なく発揮していたのではないのでしょうか。

3. 地盤沈下という災難

近代になると、舟運の利便性を背景に、江東には殖産興業を牽引すべく近代工場が林立しました。

江戸時代の下屋敷などの広大な敷地に建つ工場では、必要とする工業用水を地下から汲み上げました。工場の数や揚水量が増えるとともに、地盤沈下が生じ、明治末期頃からその影響が大きくなり、大潮の満潮時に浸水する地域があったそうです。江東が水に浸かることは、生活が脅かされるとともに、日本の近代化にも影響を及ぼす事態でした。

こうした地盤沈下に対して、高潮対策が講じられ、

当初は護岸整備が進められました。戦後、復興とともに地盤沈下量も増し、日々地盤が沈む状況に対処すべく防潮堤が建設されました。現在では、伊勢湾台風を想定した対策が採られています。

舟運という地域の強みを生かした工場立地が、地盤沈下という災難をもたらし、その対策として昭和9年より高潮対策が実施されたわけです。江東の川を取り巻く状況は、複雑に影響し合っていることが分かります。

地盤沈下で悩まされた江東ですが、今年の東北地方太平洋沖地震において、液状化による大きな被害はありませんでした。地域にとって災難であった地盤沈下によって、液状化しにくい地盤ができあがっていたのかもしれませんが。

また、高潮対策として整備された防潮堤ですが、川と市街地を物理的に分断する存在となっています。加えて、防潮堤が水害を助長する場合のあることを、内閣府の中央防災会議における大規模水害対策の議論において報告されています。江東の上流で荒川が破堤した場合、排水ポンプや水門などの施設が機能しない状況では、一ヶ月以上にわたって数メートルの水に浸かることが想定されています。洪水から市街地を守る防潮堤ですが、一度市街地が浸水すると、その水を排出させにくくする皮肉な状況が生じてしまうわけです。

4. 弱点を乗り越える知恵と工夫

いつの時代でも、江東という場所が大水に弱い土地柄であることに変わりはなく、時代によってその対処法に違いがありました。江戸時代には川と生活の直接的な関係が強く、多発する洪水には人の判断が有効な対処法となり、また、生業や遊興などの面でも川を有効に利用していました。その反対に、高度経済成長期以降では、舟運の衰退や工場廃水による水質悪化などのため、川と生活の直接的な関係は弱く、防潮堤などの治水施設が主な対処法となっています。確かに治水施設によって、近年、江東において洪水や内水は発生していません。ただし、川に対する人の関心は低く、荒川上中流域で豪雨があっても、河口域の江東の住民で洪水を想起する人は多くないでしょう。

現在、江東の川文化において欠如しているのは、川に対する関心であり、江戸時代には培われていたであろう洪水に対する判断力だと思います。その欠如を補うには、まず川を知ることです。

平成21年度、江東内部河川を対象にして、防災と観光の両面から舟運利用を図るための協議会が発足しました。日常において観光利用する舟運を、防災・減災面で利用するための議論の場です。協議会で

は、机上の議論に終始することなく、船着場や防災施設を活用した催事を通して、参加者の川に対する関心を高めることも実施されました（写真1）。



写真1 亀戸天神社協の船着場に台船を係留して開催した水上カフェ（横十間川）

また、昨年度からは防災拠点である荒川ロックゲートにおいて、NPOの主催によって避難体験キャンプが実施されています。荒川ロックゲートにおける、避難場所としての利用度を確認する社会実験で、参加者が楽しめる企画内容が印象的でした（写真2）。



写真2 荒川ロックゲートでの避難体験キャンプ

今年度、舟運を活用した新たな発想の社会実験も進められています。江東は、人口当たりの病院の数が少ない医療過疎地でもあります。そこで、医療検診船の実用に向け、先の協議会と連携して、作業が進められています。日常において健康診断等の検診を実施する船を、災害時には負傷者のトリアージの拠点として活用することを目的とした取り組みです。移動可能なトリアージの拠点は、江東の住民にとって心強い存在になると思われます。

紹介しました試みはいずれも、地域の弱点を知恵と工夫で乗り越えようとするものです。

5. 川文化を考える

江東の川に関わる歴史を紐解くと、舟遊山などの粋で華やかな場面は川文化の一面であり、川文化の根底には、洪水や高潮と闘う庶民生活のあったことが分かります。

川の怖さを理解し、その怖さと向き合い、乗り越え、そして楽しむことによってこそ、川文化の継承がなされるものと考えています。